

総合的な学習の時間における教師のカリキュラム・デザインの意識に関する事例的研究

—教師への授業後の継続的なインタビュー調査を通して—

神田 章*・松井 千鶴子**

(平成31年1月31日受付；平成31年3月28日受理)

要 旨

学習指導要領改訂のキーワードの1つとして、カリキュラム・マネジメントが挙げられた。本研究は、その重要な役割を担うであろう総合的な学習の時間における教師のカリキュラム・デザインの意識を、授業後の継続的なインタビュー調査をもとに、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて明らかにし、実際にカリキュラムを展開している最中の教師の意識の内実について検討した事例的研究である。分析の結果、「子供が学びをつくる」と「テーマのねらいを見失わせない」という子供への指導にあたる構えと、「カリキュラム展開上の足かせ」という実践上の悩みの3つの意識のカテゴリーが生成された。また、これらのカテゴリー相互の関係を基に構築した意識モデルの検討から、総合的な学習の時間における教師のカリキュラム・デザインには、子供の主体性と教師の指導性のバランスを保とうとする意識が作用していることが分かった。そして、その中で、時間・能力・協働にかかわる悩みを抱えていることも分かった。教師は、子供の主体性を生み出そうとするとともに自身の指導性を発揮しようと、様々な悩みを抱えつつも、それらを乗り越えようと葛藤し、試行錯誤しながら総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインに取り組んでいることが推察された。

KEY WORDS

総合的な学習の時間 Integrated Studies, カリキュラム・デザイン Curriculum Design, 教師の意識 Teacher's Awareness, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ Modified Grounded Theory Approach

1 問題の所在

文部科学省から小学校学習指導要領が告示され、第1章 総則「第1 小学校教育の基本と教育課程の役割」として示された4つのうちの1つに、「カリキュラム・マネジメント」が挙げられた⁽¹⁾。カリキュラム・マネジメントについて、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、答申)では、各学校の教育課程の特色に応じて学習内容等を検討していく総合的な学習の時間が、それに果たす役割の重要性を示している⁽²⁾。さらに答申では、学習指導要領等の理念を踏まえ、カリキュラム・マネジメントを「三つの側面」で捉えることができるとしている⁽¹⁾。田村(2017)は、この「三つの側面」をそれぞれ「①カリキュラム・デザイン」「②PDCAサイクル」「③内外リソース活用」であるとしている。その中のカリキュラム・デザインについて、教育目標を踏まえた全体計画、全単元を俯瞰した単元配列、子どもの学びの文脈を大切に単元計画の作成という3つの階層に分けて捉えるとともに、各教科等で身に付ける資質・能力を活用・発揮する生活科や総合的な学習の時間との関連の重要性を強調している。加えて、カリキュラム・デザインをカリキュラム・マネジメントに向けた取組のきっかけとすることは、結果的に他のPDCAサイクルと内外リソース活用につながり、これが実践者にとって日々の授業につながる重要なものであると述べている⁽³⁾。子供の資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントの充実のために、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインという視点は大きな意味をもっているといえる。

総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインにかかわって、田村ら(2014)は長野県諏訪市立高島小学校における総合的な学習の時間(「白紙単元」)の単元立ち上げ過程に着目し、過去の実践記録133事例に基づいた単元立ち上げにかかわるプロセスモデルを構築している。総合的な学習の時間における多様な学習材や展開過程をモデルによって表現することで、総合的な学習の時間の指導に困難を感じている教師への支援ツールとしての可能性を示唆している。一方、課題として、過去の実践記録を対象とした分析であることを挙げ、現在進行形の実践・実践に基づいた精緻な検討の必要性を指摘している⁽⁴⁾。

*胎内市立中条小学校 **学校教育学系

また、緒方(2010)は、総合的な学習の時間のカリキュラムをデザインしていく教師の実践的知識の内実について、熟練教師へのインタビュー記録の分析と実践に関する記録資料をもとに報告している。熟練教師の実践的知識の特徴には、学習内容や学習課題、学習活動等を吟味する「方法的な知識」、カリキュラムに関連する理論的な知識を自身で解釈・変換して獲得する「個人的な知識」、実践したカリキュラムを価値づける「評価的な知識」の3つがあると述べている。しかし、それらは個人内で育まれるため暗黙的であり、他者による客観的な理解が難しいことを指摘している⁵⁾。

村井(2017)は、総合的な学習の時間の指導にあたる教師の意識を、質問紙調査及び聞き取り調査によって分析している。質問紙調査の結果から、総合的な学習の時間の指導を好んでいない回答群の特徴として、学習の計画や進め方に戸惑いがあること、活動内容や探究方法の自由度が高いことから指導や準備に時間を要し、不安や負担に感じていることを挙げている。これらの点から、総合的な学習の時間の指導は教師の裁量によるところが大きく、それが学習の展開にも影響を及ぼしていることを示唆している⁶⁾。

このように、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインにかかわる研究では、過去の実践事例や熟練教師の実践記録等から、プロセスモデルや実践的知識の特徴が明らかにされてきた。これは、総合的な学習の時間の指導にあたる教師にとって汎用性のあるツールとして活用可能となりうると考えられる。しかし、日々子供と向き合う教師は、実践にあたり多くの不安や負担を感じている現状もある。カリキュラム・デザインの取組の主体となる教師は、実践の最中にどのような意識でカリキュラム・デザインに取り組んでいるのか、その現在進行形的な検証は十分に蓄積されているとはいえない。

2 研究の目的

本研究では、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインに取り組む教師の意識に着目し、その内実を明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

3.1 調査方法

3.1.1 調査対象

新潟県上越市立A小学校のB・C・D・E教諭4名(表1)による総合的な学習の時間の授業後の省察を対象とする。5・6年を担任する4名の教諭を選定した理由は、筆者を含む4名のチームが上越教育大学教職大学院の学校支援プロジェクト²⁾を通じて、A小学校5・6年の総合的な学習の時間の授業観察及び教育活動の補助等を中心に継続的に連携・協力しており、日常的に4名の担任と授業づくりや単元づくりについてのリフレクションや情報交換を行っているためである。

A小学校は、児童数318名(15学級)の1学年2学級編成(特別支援学級3学級)である。また、昭和52年度から文部科学大臣(文部大臣)指定研究開発学校として5度の指定を受け、教育課程開発に長年取り組んでおり、開発を行ってきた教育課程は、生活科・総合的な学習の時間を中核にして編成・実施されている(2018年4月現在)。なお、総合的な学習の時間の授業は学年合同で行っている。

3.1.2 調査期間

調査期間は、学校支援プロジェクトの実施期間を含む2017年10月から12月とする。

各調査対象者への調査回数及び時間は、以下の通りである(表2)。なお、調査回数及び時間は、学校支援プロジェクトにおけるリフレクション等を除いたものである。

表1 調査対象者の属性

対象者	性別	年代	担任学年	A小勤/全勤
B教諭	女	20代	5学年	1年/4年
C教諭	男	40代	5学年	2年/18年
D教諭	女	40代	6学年	6年/23年
E教諭	男	20代	6学年	3年/3年

表2 調査回数及び時間

対象者	調査回数	合計時間	1回の平均時間
B教諭	9回	15分11秒	1分41秒
C教諭	10回	28分16秒	2分50秒
D教諭	4回	8分22秒	2分6秒
E教諭	3回	8分34秒	2分51秒

3. 1. 3 データ収集方法

インタビューによって調査を行い、データを収集する。インタビューは、調査対象者それぞれに、総合的な学習の時間の授業直後、あるいは当日の放課後に実施し、半構造化インタビューとする。内容は、ICレコーダーとメモで記録し、逐語録を作成する。

3. 1. 4 質問項目

本研究は、総合的な学習の時間における教師のカリキュラム・デザインの意識について検討することから、1単位時間の授業のみならず、その授業以降の展開における教師の意識についてのデータ収集が必要である。武藤(2017)は、生活科・総合的な学習の時間の授業づくりについて、授業における子供の学びを見取り、それをもとに次時以降の展開を考えるものだと述べていることから⁷⁾、教師への質問項目は、以下の2点とした。

- ① 今日行った授業について、どのように感じているか。
- ② 今日の授業を踏まえて、次回の授業や今後の展開についてどのように考えているか。

3. 2 分析方法

3. 2. 1 分析の枠組み

木下(2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を採用する⁸⁾。本研究では、インタビューから得た質的データから、教師の総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインの意識モデルの構築を目指す。そのため、データに密着した分析から概念生成を行うことを志向するM-GTAが適していると判断した。

M-GTAを分析方法として用いた教育研究に、角南(2013)による、問題場面における子供に肯定的変化を促す教師の関わりの特徴を明らかにしたものがある⁹⁾。これは、教育現場における実践に対応するプロセスを含めた意識モデルの生成を目的とした研究である。したがって、本研究の目的に適する分析方法であると判断した。

3. 2. 2 分析者の視点

筆者は、現職教員であり、以前から総合的な学習の時間における指導プロセスについて関心をもってきた。そのため、本研究テーマは筆者自身の経験と問題意識によって生じたものである。したがって、分析に用いる視点には、分析者である筆者の思考が分析に影響を与えることを考慮し、調査対象である教師の視点と一定の距離を保ちながらデータを解釈することに留意した。

3. 2. 3 分析の手続き

教師から語られた全ての内容について逐語化したところ、全20,113文字であった。収集したインタビュー内容は、M-GTAの手法で、分析ワークシートを用いて整理し、構造化を試みた。なお、分析ワークシートは、概念名、定義、データの一部である具体例(ヴァリエーション)、解釈の検討等を記録する理論的メモで構成されており、1つの概念につき1つのワークシートを作成していく。分析手順は、以下の通りである。

- ① インタビュー内容を逐語化し、逐語録を作成する。
- ② 逐語録から具体例となる意味のまとまりを抜き出し、分析ワークシートに転記する。
- ③ 転記した具体例を簡潔な文章(定義)で表し、さらにより簡潔な言葉(概念)で表す。
- ④ 生成された概念及び定義を具体例と照らし合わせ、適宜修正を加える。(②～④を繰り返す。)
- ⑤ 暫定的な全体像やモデルを素描する。

前述のように、本研究では教育現場における実践に対応する意識モデルの生成を目的としているため、より一般化した概念生成を目指した。したがって、調査対象者4名のうち異なる3名以上に同様の具体例があったものから概念を生成した。以下に、概念名<時間の制約によるもどかしさ>の分析ワークシート例(一部抜粋)を示す(表3)。

表3 分析ワークシート例(一部抜粋)

概念名	時間の制約によるもどかしさ
定義	限られた時間の中で学びをつくる難しさ
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・その辺に関しては、ある程度時間の方は設定して、まあプラスアルファ的な部分にして、あの一、それで子供たちの中で目標の時間とかを決めておいて、そん中でいかに自分たちでつくっていくかっていうのを今やってる途中で。(C171013) ・あまりにもね、時間がね、ダラダラいくと、今度時数の関係もあるので、子供たちの様子を見ながら、適宜にアドバイスしたり、切っていいところは切るっていうふうに、んーと、声掛けはしていこうかなあっていうふうに考えてはいます。内容と時間のバランスは常に考えなきゃなって思います。(D171013) ・学年で、でもたしか準備の時間ほぼ取ってないので、自分たちでどういうふうに動いていくのかってのもあれなんですけど、やっぱり隙間時間ができると「先生、やってもいいですか」とか、すごい言ってくれるので、自分たちで課題が分かかって時間欲しくてのが分かっているんで、ぜひこう隙間空いたらあげてあげて自分たちの思う形にさせてあげられたらなって思ってます。(B171019) ・明後日土曜日はそこまで時間取れないかなと思って、明日勝負かなって思っているんで、明日の1限と4限でとびとびなのでやりにくいんですけど、まあそれでできる限りの範囲でやってもらえればなあと思ってます。(E171019) (以下、省略)
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムを展開していく上で頭を悩ませる概念なのであろう。 ・納得解に関する概念と影響関係があると考えられる。 (以下、省略)

4 結果

分析の結果、10個の概念と3個のカテゴリーを生成した(表4)。

表4 生成されたカテゴリーと概念及び定義

カテゴリー	概念	定義
子供が学びをつくる	子供の思いをもとに学びをつくる	子供の思いをもとに授業・活動をつくっていく
	子供の言葉に耳を傾ける	言葉や文章から子供の考えや思いを把握する
	子供をやる気にさせたい	よりよい授業・活動に向けての子供の意識(意欲・やる気)を高めたい
	よさ・がんばりを認める	子供のよさに着目し、達成感を得させたい
テーマのねらいを見失わせない	テーマのねらいを重視	目先の目的でなく、本来の学習の目的を持ち続けられるような活動の組織
	目指す姿を見据えて学びを構想する	目指す子供の姿をイメージしたカリキュラムの構想
	テーマのねらいに迫るしかけを講じる	しかけを講じて問題意識を高め、学習の目的を考えさせたい
カリキュラム展開上の足かせ	時間の制約によるもどかしさ	限られた時間の中で学びをつくる難しさ
	納得解を導き出す苦悩	答えのない課題に対する自らの答えを見いだすことと指導の難しさ
	担任間の意思疎通の必要性	担任同士の考えを共有して学びをつくっていく必要性

以下、分析結果をカテゴリーごとに説明する。なお、< >は概念、【 】はカテゴリーを示す。

4.1 【子供が学びをつくる】

教師は、総合的な学習の時間におけるカリキュラムを展開していく際、「作文シートを見て、その子たちの内なる思いをちゃんと確認してから、また次時につなげられたらいいなっていうふうに考えてます(B171025)」「やりたくないっていうふうに子供が反応するのは、あの一、活動自体が停滞してるからだと思うから、失敗だと思います(D171214)」のように、授業の振り返りで書く作文の内容や放課後の子供との何気ない会話等に着目し、子供の思いや考えを日常的に把握しようとしており、<子供の言葉に耳を傾ける>ことを重視している。

また、「本気でやるっていうのはどういうことなのかなっていうか、これで、俺たちこのままでいいのかなってい

うのを、どこかでやらなきゃだめかなって(E171013)」「各チームごとの状況説明をして、『他のグループと比べて自分たちはどうなのか』っていうのを考えながら、もう1回気持ちは高めていこうかなとは思っているところですね(C171013)」のように、他教科等との関連を図ったり、子供に自らの状況を他者と比較して客観視させたりすることで、よりよい授業や活動に向けて、子供の意欲ややる気といったものを高めたいと考えており、<子供をやる気にさせたい>という思いをもっている。そのため、区切りとなる活動を終えた子供が、次の活動へもやる気をもって臨めるように、「褒めて褒めて、認めて認めて、がんばりを認めてあげると、子供たちの中でも、例えば本番失敗したとしても、多少少し自信が出る(C171013)」「ただ、今は、もうだいぶ充実したっていうか、やり遂げたみたいなの充実感はあると思うので、そこらへんは大事にしたいかな(D171024)」のように、よさに着目しながら、<よさ・がんばりを認める>ことを大切にしている。

このような考えは、教師が総合的な学習の時間の学習内容について、「こちら側の提案っていうよりかは、自分たちでこう決めて、やるみたいなのところにちょっとずつ活動が向いているので(E171013)」のように、子供が決めたことに向かって自発的に活動したり、「今で言うと7:3ぐらいの割合で(出荷)したくないという子もいたので、そこをうまく拾って行って、で、悩んでる子もいるので、それに関しても、このシートをもとにして、今度語りが入ってくるかな(C171025)」のように、授業が子供同士の話し合いをもとに進んでいったりするように学習を組織していくという構えをもっているためである。つまり、子供が試行錯誤しながらも自らの思いで学習をつくり上げることができるよう、<子供の思いをもとに学びをつくる>という姿勢をもっているのである。以上のことから、教師は【子供が学びをつくる】という意識のもとカリキュラムを展開しているといえる。

4. 2 【テーマのねらいを見失わせない】

教師は、「今後の活動としては、まず短期目標としては、(中略)一区切りできるように活動を進めていかなくちゃいけないなっていうふうに思います。長期目標として、(中略)今の活動がどのように生かされるかっていうところも考えながら、裏の方では次の活動の準備を進めています。で、さらにいくと、今の活動が3月になったらどういう子供の姿につながるかっていうことで、3段階ぐらいに分けて考えて、カリキュラム的には頭の中では構想していかなくちゃあなっていうふうに考えます(D171013)」「今回はオッケーなんだけど、決してこれはゴールではないので(C171024)」のようにカリキュラムを展開していくにあたり、その全体の構想を立てている。そして、「次の時間は、(中略)対象が自分たちの地域から今度は県外になるので、そういった視点も踏まえながら、どういうふうな活動を仕組んでいくことで、より高田と、んーとその県外の人たちにつながるような活動ができるのかなっていうのは、ちょっと考えていかなくちゃあな(E171024)」「なんか自分の中でちょっと感情的から、学習の目的とか飼育の目的にもう少し寄っていてももらえればいいかなあとは思っている。あとはもうそこで金曜日もんで(議論して)、来週1回、まあこういう状態だけど、木金どちらか出荷だよってことを伝える、で、出荷を受けてその後どうだったかって(C171108)」のように活動ごとの構想も立てている。教師は<目指す姿を見据えて学びを構想する>ことを大切にしてい、カリキュラムの展開を工夫している。学年主任であるC・D教諭は、特にカリキュラム全体の構想を重視しており、見直しをもって取り組もうとしていることがうかがえる。

また、「本番になったらちょっと課題意識をまた強めてほしいので、あの一伝えた相手からレスポンスがもらえるようにこちらでしかけようと思う(D171019)」「ちょっとビデオ見せる、映像であの子たちもやっぱり視覚的に捉えさせて、で、初発の『どうする?』って言った時に、子供たちどう書いてくるかなっていうのが、意見交流なしにして、いきなりストレートに(作文)シートに書かせようかと思って(C171024)」「出荷の前に(肉豚)あとおと最後にかかわる時間をもって、『あーこういう思い出があったなあ』とかそこを高めさせておくと、逆にいなくなった後に、本当に、『そうか、こういうことをして自分たち今までお肉食べてたんだ』っていうのが伝わってくればいいかなと思うので(B171115)」のように、子供の問題意識を高め、学習する目的を考えさせるためにしかけを講じようとしている。子供に他者からの反応を実感させたり、現実的な問題を突きつけて心情を揺さぶったりして、学習における<テーマのねらいに迫るしかけを講じる>ことを大切にしているのである。

このような考えは、学習する子供の姿や思いを教師が的確に捉えているからこそ生起しているといえる。学習が進んでいくと、子供は活動に没頭することがある。これは一見、子供が自発的・意欲的に活動を進めているようだが、目先の活動自体に目が向けられていることがある。「なぜこの学習をするか」「何のためにこの活動をしているか」といった本来の活動の目的を見失ってしまっている可能性がある。インタビューにおいても、「『子ども祭り』で発表するっていうのは、じゃあ何のためにするのっていうのがすごく大事な部分があって、(中略)やっぱりそのなぜ伝えるかっていう部分を子供たちの中で確認をしてあって、その思いつてのはやっぱり強くずっともっていったらなって、継続していきたいなって思っているのがあるんですよね(C171013)」「自分たちで何を伝えたいのかっていうその根

本の部分を、やっぱり思い出させないと、その時に思った『あ、景品いいな』『あ、塗り絵してみよう』『これしてみよう』っていう外側は膨らんでいるんですが、芯の部分が私ちょっと弱いんじゃないかなって思っているの、そこをきちんと考えさせていかないと(B171013)」「今の状態では繰り返してるだけで、全然なんか、子供自身が進展してないと思うから、もう1回何を目指してるのかっていうのは、ちょっと見て、軌道修正しなくちゃいけないあとと思う(D171214)」のように、子供が、目先の目的ではなく、本来の学習の目的を持ち続けられるように活動を組織しようと、<テーマのねらいを重視>するという姿勢をもち、カリキュラムを展開している。つまり、教師は【テーマのねらいを見失わせない】という意識をもって子供と向き合っているといえる。

4. 3 【カリキュラム展開上の足かせ】

教師は総合的な学習の時間を進めていくにあたり、前述した【子供が学びをつくる】【テーマのねらいを見失わせない】という意識のもとカリキュラムを展開しているが、その中でいくつかの悩みを抱えている。

まず、「6年生なので、対外的な行事が入ってきて、(中略)そういった活動も流しつつ、子供の成長はぶれないでっていうのは考えていかなきゃいけない(D171013)」「明後日土曜日はそこまで時間取れないかなと思って、明日勝負かなって思ってるので、明日の1限と4限でとびとびなのでやりにくいんですけど、まあそれでできる限りの範囲でやってもらえればなあと思ってます(E171019)」「結局もう出荷は木曜日の10時からに決めさせてもらって、もう金曜日もだめなので、で、その、来週っていうと、月金っていうと厳しいのでっていう話があって、木曜日の10時からにさせてもらって、で、結局明日は、もう、その一、電話するから最終決定しようっていうことは伝えておこうと思って(C171113)」のように、当初から予定している活動があることによって時間的な制限が生まれ、学校内外の行事に煩わしさを感じたり、子供の納得や合意形成がなされないままカリキュラムを展開せざるを得ない状況に不自由さを感じたりしている。つまり、<時間の制約によるもどかしさ>を感じているのである。

次に、「自分自身も出荷しなきゃってのは分かるんですけど、自分がその返ってきた肉を食べれるのかとか、今までこうして育ててきた子(肉豚)をって思うと、何かやっぱり、うーん、何か自分でも何が正解なのかなって分かってないものを子供に投げ掛けてしまうので。もちろん子供に考えさせる前に自分で結論出しておかなきゃなっていうふうには思うんですけど、ちょっとあんまり正直本当は触れたくないなっていうか、うーんな部分の授業だと思ってます(B171019)」のように、教師自身が学習における納得解を導き出すことの難しさを感じている。また、「まだ4回目ぐらいなので、5回目か、なので、ちょっと自分としてもね、なんかね、どう落としていくとかいうのが、ちょっと今ぶれてるなっていうのが、自分やっても分かるので。まあ、んー難しいなあっていうのが、はっきり言ってそこが(C171108)」「今のままだとたぶん子供が何を視点にして、どういう方向性でPRを、こう高めていってっていうのが子供たち自身もいまいち分かってなくて、なんか、そういう姿をもうちょっとしっかり見取らないとだめだなっていうのは思うから。まあたぶん23日って、あんまり成功したとか達成感が、んーなんか、もてるかなあっていうところはちょっとあるのでね、ちょっと少し考えなきゃなと思う(D171214)」のように、指導の際、子供が納得解を導き出すことの難しさも感じている。つまり、学習における<納得解を導き出す苦悩>を感じており、それは教師自身が感じることに子供に対しての指導で感じるものの二面性があることがうかがえる。

さらに、「一応こう、子供たちこういう感じなんですけどっていうことも(C教諭と)話したりはしていきたいなとは思いますが、なかなかあんまりできてないのが正直なところなので(B171108)」「(B教諭に)話してもらった時に、結構全部バーって出してしまったので、ちょっとー、うーん、小出しにしてもかなあと思ったんだけど、でもあんま打ち合わせしちゃうと本音が出てこないの、そのどっちが良かったかなっていうのは、すごく自分としても。まあスイッチは入っちゃうので彼女(B教諭)もやっぱり思い入れが強いついていうことだから、まあそれが間違いではないので、ちょっと今日は出しすぎたかなという気はすごくしているかなと思います(C171113)」「ちょっと本当に総合の主でやってるEさんとも話をして、ちょっと軌道修正が必要なんだろうなと思うんですけど(D171214)」のように、学年というまとまりで学習を進めているため、担任同士で子供の実態や学習の進め方等について共有したいと感じている。しかし一方で、そういった時間をなかなか取れない現状がうかがえる。つまり、時間が取れないという状況の中で、<担任間の意思疎通の必要性>を感じているのである。

教師は、<時間の制約によるもどかしさ>や<納得解を導き出す苦悩>、<担任間の意思疎通の必要性>を【カリキュラム展開上の足かせ】と感じ、その悩みを抱えながらカリキュラムを展開していると捉えられる。

以上のような分析結果をもとに、意識モデルを生成した(図1)。

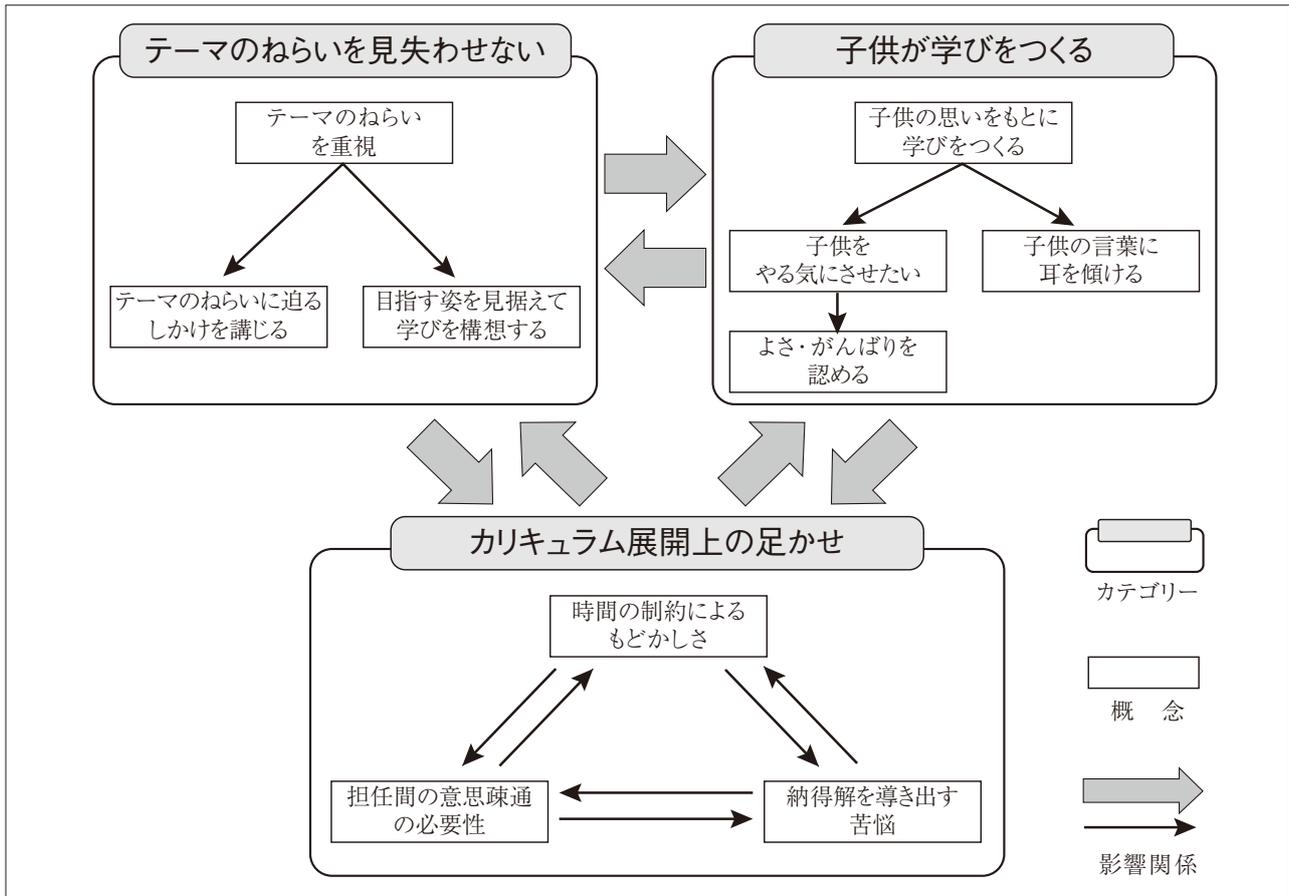


図1 総合的な学習の時間における教師のカリキュラム・デザインの意識モデル

5 考察

5.1 【子供が学びをつくる】【テーマのねらいを見失わせない】という両輪

文部科学省は、「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編」において、総合的な学習の時間における学習指導の基本として、「教師の指導性と児童の自発性・能動性とのバランスを保ち、それぞれを適切に位置付けることが豊かで質の高い総合的な学習の時間を生み出すことにつながる⁽¹⁰⁾」としており、子供の主体性ととも学習を活性化させる教師の指導性を重視している。また、村川ら(2017)は、子供のよりよい学びの実現には、教師の指導が大きく関係しており、教師の具体的な単元・授業の構想と実践に基づく評価・改善の必要性を述べている⁽¹¹⁾。

以上のことは、本研究において見いだされた教師の意識においてもいえることであると考えられる。本研究では、教師が子供の言葉に耳を傾けながら、彼らの思いややる気を大切に、【子供が学びをつくる】という姿勢のもと、総合的な学習の時間のカリキュラムを柔軟に展開させていることが明らかになった。また、その一方で、教師は学習するテーマのねらいを重視し、そのねらいに迫るようカリキュラムの展開を構想したり、しかけを講じたりして、【テーマのねらいを見失わせない】よう戦略的に子供の学びをつくり上げようとしていることも明らかになった。教師には【子供が学びをつくる】【テーマのねらいを見失わせない】という意識があり、双方のバランスを保とうとしている。この意識が総合的な学習の時間におけるカリキュラム・デザインの両輪となって、教育活動に作用しているといえる。子供主体という構えがありながらも、子供にとって意味ある学びとなるよう教師が意図的な支援を行っていくという意識をもつことが、カリキュラム・デザインを進めていく上で重要であると考えられる。

5.2 【カリキュラム展開上の足かせ】の存在

本研究で明らかになったのは、教師が、〈時間の制約によるもどかしさ〉や〈納得解を導き出す苦悩〉、〈担任間の意思疎通の必要性〉のような悩みを抱えながら、総合的な学習の時間のカリキュラムを展開しているということである。

ある。三者はいずれもそれぞれの意識に影響を与え合い、教師の【カリキュラム展開上の足かせ】となっているといえる。これは例えば、活動に向けた期日が決まっている(時間の制約がある)ため、子供の合意形成を得られなかったり(納得解を導き出せなかったり)、担任間で子供の様子や活動に向けた学習展開を共有できなかったり(担任間で意思疎通が図られなかったり)している状態でカリキュラムを展開せざるを得ないということである。教師は時間・能力・協働の面で悩みを抱えながら、総合的な学習の時間のカリキュラムを展開しているといえる。

6 まとめ —総合的な学習の時間における教師のカリキュラム・デザインの意識—

ここまで述べてきたように、教師は総合的な学習の時間において、子供主体で柔軟に学習を展開していく【子供が学びをつくる】という姿勢をもちながら、子供にとって意味ある学びとなるよう【テーマのねらいを見失わせない】意図的な支援を行っている。また、その中で時間・能力・協働にかかわる悩みを抱え、それらが【カリキュラム展開上の足かせ】となっている。このように、教師は様々な悩みをもちながらも、日々の実践に取り組んでいることがうかがえる。

しかし、足かせが一方向的に子供の主体性や教師の指導性を阻害しているとはいえない。限られた時間だからこそ、子供が自ら学びをつくり、なおかつ学習におけるテーマのねらいを見失わせないようにするために、活動時間を捻出したたり、現時点での納得解を自ら導き出したりしている。また、教師が納得解を導き出せない状況だからこそ、子供の言葉に注意深く耳を傾けたり、担任同士で意思疎通しながら目指す姿に向けてカリキュラムを構想したりしている。したがって、限られた時間であること、学習における納得解がはっきりと見いだせないこと、同僚との関係性、といった【カリキュラム展開上の足かせ】といえる様々な悩みを抱えているからこそ、逆に教師が子供の主体性や自身の指導性を重視する意識につながっていると考えられる。

7 課題

本研究における課題を2点述べる。

1点目は、分析方法に用いたM-GTAに関する課題である。M-GTAの特性上、生成された概念に基づく理論(本研究における意識モデル)は実践の活用のためのものであり、理論の応用によって検証を行うものである。そのため、本研究によって生成された理論を実践を踏まえて修正していく必要がある。実際に総合的な学習の時間に取り組む教師だけでなく、それをサポートする教師や組織が、教育現場で活用しながら修正を加えていくことが課題である。

2点目は、データ収集における課題である。本研究は、調査対象が4名、調査期間が3か月間であり、なおかつ総合的な学習の時間の授業直後のインタビューに限定したため、収集したデータは質的研究のデータ量としては乏しいといわざるを得ない。今後、継続研究として取り組むことによって、データ量の確保とともに、調査対象及び期間の拡大や、インタビュー場面の精選を行うことが可能となる。それによって、本研究における精緻な検討はもちろん、カリキュラム・デザインだけでなくカリキュラム・マネジメントについての教師の意識についても検討できる可能性がある。

注

1) 答申では、カリキュラム・マネジメントの三つの側面を以下のように捉えている。

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

2) 上越教育大学教職大学院の実習科目である。連携協力校といわれる上越市内及び上越市周辺の公立学校における教育課題の解決に向けて、大学院生(学卒院生及び現職院生)が複数名でチームを編成し、約3～4か月間、連携協力校と協働して継続的に取り組む教員養成プログラムの1つである。本研究では、学校支援プロジェクトにおける取組や日々の授業観察、担任とのリフレクション等をデータの解釈や考察に反映した。

引用文献

- (1) 文部科学省：『小学校学習指導要領(平成29年告示)』, 東洋館出版社, p.18, 2018
- (2) 中央教育審議会：「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」, p.25, 2016
- (3) 田村学：『カリキュラム・マネジメント入門』, 東洋館出版社, pp.31-52, 2017
- (4) 田村恵美, 桐田敬介, 梶川朋：「総合的な学習の時間の単元立ち上げ過程に関する質的研究 —M-GTAによる『白紙単元立ち上げ』プロセスモデルの構築—」, 日本生活科・総合的学習教育学会誌 せいかつか&そうごう 第21号, pp.112-121, 2014
- (5) 緒方真奈美：「カリキュラムデザインにおける教師の実践的知識に関する事例研究 —善元幸夫氏による単元デザインの場合—」, カリキュラム研究 第19号, pp.43-57, 2010
- (6) 村井万寿夫：「総合的な学習の時間の指導にあたる教師の意識に関する研究 —金沢市の小学校教師を対象とした調査を手がかりに—」, 日本教科教育学会誌 第40巻 第2号, pp.31-41, 2017
- (7) 武藤牧子：「学びをつなぐ生活・総合の授業づくり」, 田村学編著・横浜市黒船の会著『生活・総合「深い学び」のカリキュラム・デザイン』東洋館出版社, pp.14-20, 2017
- (8) 木下康仁：『ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』, 弘文堂, 2007
- (9) 角南なおみ：「子どもの肯定的変化を促す教師の関わりの特徴 —修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成—」, 教育心理学研究 第61巻 第3号, pp.323-339, 2013
- (10) 文部科学省：『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総合的な学習の時間編』, 東洋館出版社, p.109, 2018
- (11) 村川雅弘, 八薊明美, 三田大樹, 石堂裕：「資質・能力の育成につなげるアクティブ・ラーニング」, 日本生活科・総合的学習教育学会誌 せいかつか&そうごう 第24号, pp.14-23, 2017

参考文献

- ① 戈木クレイグヒル滋子：『質的研究方法ゼミナール —グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ—』, 医学書院, 2005
- ② 奈須正裕：『「資質・能力」と学びのメカニズム』, 東洋館出版社, 2017
- ③ 上越教育大学：『上越教育大学流 平成30年度 上越教育大学 教職大学院案内「学校支援プロジェクト」を中核としたプロフェッショナルな教員養成カリキュラムの実現』, 2017

A Case Study of Teachers' Awareness of Curriculum Design for Integrated Studies

—Based on Continuous Interview Survey for Teachers after Integrated Studies Classwork—

Akira KANDA* · Chizuko MATSUI**

ABSTRACT

Curriculum management is one of the keywords for revising courses of study, and its important role will be curriculum design for integrated studies. This study is a case study clarifying the teacher's awareness of curriculum design by using a Modified Grounded Theory Approach based on continuous interview survey after integrated studies classwork. As a result, the teacher's awareness of teaching guidance to children "children create learning" and "not to lose sight of the theme" and practical troubles of "fetters in developing curriculum" category was created. Considering the relationship between these categories as a hypothetical model, it is found that there is an awareness in the curriculum design of the teacher at the time of integrated studies, to keep the balance between the subjectivity of children and the leadership of teachers. It is found that teachers have trouble with time, ability and collaboration. It was inferred that teachers are conducting curriculum design at the time of integrated studies by trial and error, while having various problems in demonstrating the subjectivity of children and the leadership of teachers.